

実践報告

# バレーボールの授業の充実に向けた研究 ——大学生に着目して——

Study for Improvement of Lesson of Volleyball: Focusing on College Students

佐藤 国正

桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部

(2017年9月28日 受理)

## I. はじめに

### 1. 研究の目的と方法

桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部の専門科目の1つに定められている「バレーボール」は、学内において中学校・高等学校教諭1種免許状(保健体育)取得に必要な教科に関する科目に設けられているため、免許状取得を目指す学生にとっては避けては通れない科目の1つとなっている。

筆者が実施している「バレーボール」の履修者の実態は、中学校・高等学校教諭1種免許状取得を目的として履修した者、卒業要件単位を充たす為に止むを得ず履修した者、バレーボールが好きだから履修した者など、様々な志向のある学生達が共存していることが窺える。これらの実態の把握は、筆者自身が受講生への問いかけによって明らかとなっており、履修生の間に「バレーボール」の授業の学び方に差異があることも受講姿勢から理解している。

桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部の「バレーボール」科目の授業運営は、大学の学務運営方針に従って、スポーツ教育学科・ス

ーツテクノロジー学科・スポーツ健康政策学科の3学科の学生が学科毎に二分され、男女の性差に関係なく1クラス40名程度のクラス編成によって授業が構成されている。その為に1クラス辺りの履修者数の比重は、編成クラス毎に差異が生じているともいえる。また、授業への出席管理を制度的な方法を用いることがなければ出席者が減ったりするなど、授業毎の受講生の数の実態は予測が就かないほど僅かになることもある。

こうした中で筆者は2016年度の前期・後期に加え、2017年度前期修了まで389名の履修者を対象に授業を実施し、2017年度前期には3クラスの授業を実施している。

履修者は、大学が構築した効率の高いシステム化された時間割に組み込まれた科目を受講する為に講義室へ赴き、教員が作成した授業計画と指導方法に従って授業を受講し、自らの学習到達度によって成績評価を下される。付言するが、学生の単位認定は、履修者が授業を通じて科目のねらいや到達目標をクリア出来ている否かが1つの指標となっており、履修者は条件付き自由度のなかで学習していることとなる。

筆者は先のような授業実績を有しながら履

修者が本科目の履修にあたって、根源的に何を目的に受講し、どのような学習意欲を持ち、如何にして単位修得を目指そうとしているのかという学習者に対する疑問を抱いてきた。また、授業者の授業に対して履修者の満足度や学習に対する充足感を果たしているのかを検討したいという考えを持つようになった。

そこで本研究では、自身の「バレーボール」の授業の充実に向けた取り組みの再考として、2017年度前期履修者115名を対象に授業への充実感や閉塞感、授業を通じて習得した技術などについての質問項目を設定し、記述式の回答を求めている。履修者は、授業者から提示される授業計画を基に如何なる関心を抱いて履修し、授業へ取り組んでいるのか、授業が授業者の押し付けまたは自己満足的な授業運営になっていないかについて、学生の記述回答をもとに検討してみることにした。

本稿では、科目のねらいや到達目標、シラバスについて触れながら、従前と今後の授業運営への振り返りの契機となることが期待されるであろう。また、先行研究を深めるなかで、大学生を対象としたバレーボールの教材および授業研究が希薄であることが窺え、大学生を対象としたバレーボールの教材研究としても意義深いものになるであろう。

## II. 教材としてのバレーボール

### 1. バレーボールの競技特性

バレーボールは、ネット型のチームスポーツのひとつである。インドアやビーチバレーボール、さらにチーム人数だけでなく、カテゴリー別にネットの高さ、コートの大きさやボールの重さなども異なるさまざまな型式を有している。

ここでは、公益財団法人日本バレーボール協会の指導書『コーチングバレーボール基礎編』<sup>1)</sup>を参考としてバレーボールの特徴についてまとめてみることにする。

バレーボールの特徴的な動作として、プレーする際に手または腕などの身体でボールを「打つ（ヒットする）」ことが挙げられる。そして、バレーボールの語源である「ボレー」（Volley）は「ボールが地面（床）に着く前に打つこと」であり、ボールをキャッチすることがルールで禁止され、そのため、自コートにボールを落とさないように、また相手コートにボールを落とすように、ボールを「つなぐ」「弾く」「打つ」ことが求められる。加えて、ボールをつかんだり投げたりできない、または同じ選手が連続してヒットできないため、ボールコントロールが難しい競技といえる。さらに、双方のチームはネットで区切られており、相手チーム選手との接触がなく、返球までにブロックの接触に加えて3回までボールヒットが許されていることから多様な攻撃パターンを作り出すことが可能な競技である。

これらについて、バレーボールの運動特性の視点を交えながら整理してみることとする。

- ① ネットを隔てた比較的狭い場所でも多人数で楽しむことができ、運動量、質的に他の競技よりも少なく生涯スポーツの代表的な種目である。
- ② テレビ中継等によりバレーボールのゲームを目にする機会が多く、男女の性差に関係なく興味や関心度の高い種目である。
- ③ ボールが空間で動いているときにインプレーの状態であり、ボールを保持できない為にミスプレーの出現率が高く、瞬時の状況判断と行動選択が求められ、チーム内の連携、意思統一が必要となる。
- ④ 相手コートにボールを落とすためにボールをコントロールして攻撃する技術、戦術が要求される。
- ⑤ チームでボールを繋ぎ合いながら得失点の攻防を楽しむことができる。
- ⑥ バレーボールは相手とのプレー接触がないため男女混合チームでのチーム編成が可能であり、ネットの高さやルールに工夫を加えることでゲームを楽しむことができる。

これらの競技特性および運動特性から我が国の学習指導要領内においてバレーボールが取り扱われるようになってきている。以下では、学習指導要領内でのバレーボールの実態と課題について触れてみることにする。

## 2. 学習指導要領におけるバレーボールの実態と課題

バレーボールは、1896年にアメリカで誕生したスポーツである。我が国においては、戦前から体育科教育の教材の一部として中学校・高等学校の学習指導要領で取り扱われてきた。しかしながら、1998年に改訂された小学校の学習指導要領において、ソフトバレーボールが例示されるようになった。さらに今日の学習指導要領では、球技の攻守の特徴や「型」に共通する動きや技能を系統的に身に付けさせるという視点により、「ゴール型」、「ベースボール型」、「ネット型」に分類され、「ネット型」の教材としてバドミントン、テニス、卓球と並列してバレーボールが挙げられている。

1964年の東京オリンピックから正式種目となり、日本女子チームの優勝により日本でのバレーボール人気が一気に高まったことも影響し、運動種目としての認知度が高いうえに、他のネット型種目とは異なり3人以上で行う集団スポーツとして、多くの学校の体育授業ではバレーボールが取り扱われるようになった。

バレーボールについて、学習指導要領では「仲間と連携した動き」がねらいとされ、バレーボールの学習を進めていくうえで大切な技術としての連係プレーを成立させる正確なパス動作の習得が重要になることが理解される。

しかしながら、中村ら<sup>2)</sup>の研究によると、ボール操作の難しさから、連携プレーを用いた戦術的学習が成されず、ゲームが成立していない実態を報告している。また、山中は「生徒は、パス技能が向上しないことにより、ゲームの中でうまく味方にボールをつなぐこ

とができず、バレーボールの魅力であるラリーや連携した攻撃や守備を行うことができないまま授業を終えてしまっている」<sup>3)</sup>と言及している。

このように文部科学省が掲げる学習に対する理想像と教育現場レベルにおける学習の実態には大きな開きがあることが窺える。教育現場で指導する教員たちはその狭間で効果的な指導法と学習過程を模索しながら授業運営をしていることが理解される。

大学に入学してきた学生達のバレーボールに関する技能レベルやバレーボールに対する意識について、高等学校以下での学習の仕方によって差異があるということである。

## Ⅲ. 先行研究との比較

### 1. 宮内論文を事例として

「バレーボールにおける学習指導に関する一考察（第3報）——大学生のバレーボール観について——」<sup>4)</sup>のなかで宮内は、学生達に対して『バレーボールの授業で楽しいのは何か』との質問への回答が『ゲーム』84.6%であったことを明らかとした。さらに『技術練習に着目した』質問では、『スパイク練習』14.7%と回答する者が多かったことを明らかにしている。

また、『バレーボールの試合の楽しさは何か』との質問に対して、最も回答が多かった項目が『ラリーが続くこと』51.2%であり、それ以下は『試合が盛り上がること』42.3%、『チームワークがいいこと』34.5%、『スパイクが打てること』22.9%、『勝つこと』17.7%であったことを報告している。

一方、『バレーボールの試合での嫌なことは何か』との質問に対しては、『ラリーが続かないこと』34.1%が回答であり、それ以下は『試合が盛り上がらない』33.1%、『チームワークが悪い』29.7%となったことを報告した。

宮内は、授業におけるバレーボール指導に

において、技術指導・班編成・試合のルールそして授業の雰囲気などの工夫を凝らすことが授業への積極的参加に繋がるものと提言している。

## 2. 内田論文を事例として

「バレーボールの授業に関する研究」<sup>5)</sup>において内田は、男子学生と女子学生の性差によって『バレーボール授業内で感じる楽しさ』に違いがあることを明らかにした。

男子学生は、『スパイクを打ち得点したいとする意識』が強く23%、次いで『チームワーク』21%であった。

一方、女子学生は『チームワーク』36%と著しく高く、次いで『サーブがうまく打てた時』13%であったことを報告している。

また、『バレーボールをつまらなく感じる時』についての回答を求めた質問では、男女の学生共に『うまくプレーできない』ことが最も高い回答であった。

さらに、内田は学生達へ『授業に望むこと』を質問したところ、男子39%、女子43%で共に『楽しさ』をバレーボールの授業に求めていることを報告している。

## 3. 先行研究を活用したシラバス

教材としてのバレーボールについて、大学生を対象とした授業研究、教材研究が希薄であることが理解された。

本稿で扱った宮内と内田が実施した大学生を対象としたバレーボール授業の充実に向けた研究成果を礎に筆者のバレーボールの授業計画であるシラバスは以下の通りである。(以下、桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部2017年度バレーボールのシラバスを参照)

- 科目のねらい：バレーボール競技のゲーム実践に求められ得る個人の基礎技能の習得および仲間との協力関係における集団技能の習得、そして円滑なゲーム運営に関する審判法の習得である。また、バレーボール競技の特性を理解しながら、自らがバレーボール競技の楽しさについて触れる機会と

し、自発的に学習に取り組む姿勢を育成する場とする。

- 到達目標：バレーボール競技のゲーム実践に求められ得る個人の基礎技能の習得および仲間との協力関係における集団技能の習得、そして円滑なゲーム運営に関する審判法の習得
- 授業計画：第1週目から第15週目については下記の通りである。
- 第1週目：オリエンテーション（授業の進め方、評価、注意事項）
- 第2週目：バレーボールの歴史と発展
- 第3週目：基礎技能①パス【オーバーハンドパス&アンダーハンドパス】
- 第4週目：基礎技能②レシーブ【ディグ・レセプション】
- 第5週目：基礎技能③セット&アタック①【セカンド・テンポ、サード・テンポ】
- 第6週目：基礎技能④セット&アタック②【ファースト・テンポ】
- 第7週目：基礎技能④サーブ【アンダーハンド・サイドハンド・オーバーハンド】
- 第8週目：基本戦術：フォーメーション
- 第9週目：審判法の理解と実践
- 第10週目：ゲーム実践①【2人～4人によるウォッシュゲーム①】
- 第11週目：ゲーム実践②【2人～4人によるウォッシュゲーム②】
- 第12週目：ゲーム実践③【6人制ゲーム：ローテーションと固定ポジション】
- 第13週目：ゲーム実践④【6人制ゲーム：ローテーションとポジション①】
- 第14週目：ゲーム実践⑤【6人制ゲーム：ローテーションとポジション②】
- 第15週目：まとめ・テスト

2017年度のシラバスでは、宮内と内田が示すゲームや技術練習に関する授業構成を網羅しながら授業計画を設定している。



#### Ⅳ. 授業に関する学生の反応

##### ——記述回答を事例として——

ここでは2017年度のバレーボールを受講した学生115名を対象に実施したバレーボール授業に関する質問項目と記述式回答を事例として、受講生の学びに対する意識を読み解いてみることにする。

質問紙には、①『バレーボールの授業が楽しいと感じた場面』、②『バレーボールの授業がつまらないと感じた場面』、③『バレーボールの授業で身につけた技能』、④『バレーボールの授業を通じて身につけた技能以外』の4題を設け、記述式で回答させている。その際に、宮内(2000)と内田ら(2005)が用いたアンケート項目を参考としながら、学生達の回答を独自に分類し、処理することとした。

以下で記すが、2017年度のバレーボールの教場について、学務遂行の都合上により下記で示すDクラスはバレーボールコート1面のみ使用可となり(他2クラスはバレーボールコート2面使用)、他クラスとの教場空間における平等性は保たれていない実態がある。

さて、質問①についての回答を分類してみると、『ゲーム自体やゲームの勝敗さらにはラリーの継続』に関する事項、『基礎技能の習得』に関する事項、『チームワーク等のコミュニケーションスキル』に関する事項に分類されることが明らかとなった。

ゲームの勝敗に特化せずにゲームそのものが白熱したか否か、盛り上がったゲームであったかどうかについての記載が散見された。

質問②については『ゲームの内容』に関する事項、『基礎技能の未熟さ』に関する事項、『チームワーク等の欠如』に関する事項、『特になし』に関する事項に分類された。

質問②の回答で興味深いのは、基礎技能について自らが技能の習熟度に対して嫌気を指すような記述やチーム内で自己中心的なプレ

ーや立ち居振る舞いをする者について嫌悪感を示す記載が目立ったことである。また、学務遂行の都合上バレーボールコート1面のみの使用を余儀なくされたDクラスは、『ゲームの待ち時間が長い』との場面について記述した者が多かった。

次に質問③では、授業計画に基づいた『基礎技能①～⑤』についての回答が成されていた。しかしながら、基礎技能③と基礎技能④に関する明記が殆ど見当たらず、「トス」や「スパイク」についての用語が使用されていることが記述から確認され、用語と動作の混同があり、十分に整理されていないことが理解された。

そこで、ここでは『パス』に関する事項、『レシーブ』に関する事項、『セット&アタック』に関する事項、『サーブ』に関する事項に区分し、回答を分類することとした。加えて学生達の回答の中でレシーブの技術項目の区分についても混乱している実態が理解された。

最後に質問④については、『チームワーク等のコミュニケーションの重要性』に関する事項、『コートの設営方法』に関する事項、『ルールや審判法』に関する事項に分類した。

学生同士の声掛けや状況に応じた行動に関する判断力が求められたなどの回答が散見された。一方で、同じクラスにいながらも初めて会話をするとといった人間関係に関する記述もあった。

クラス別の回答は以下の通りである。

##### 1. 【Dクラス：履修登録者数45名(男：29名、女：16名) 質問紙への回答者数41名】

質問①：『ゲーム自体やゲームの勝敗さらにはラリーの継続』82.9%、『基礎技能の習得』56.0%、『チームワーク等のコミュニケーションスキル』46.6%であった。

質問②：『ゲームの内容』46.3%、『基礎技能の未熟さ』29.2%、『チームワーク等の欠如』17.0%、『特になし』21.9%であった。

質問③：『パス』65.8%、『レシーブ』17.0%、  
『セット&アタック』51.2%、『サーブ』  
24.3%であった。

質問④：『チームワーク等のコミュニケーション』92.6%、『コート設営』26.8%、『ルールおよび審判法』21.9%であった。

## 2. 【E クラス：履修登録者数 37 名（男：30 名、女：7 名）回答者数 34 名】

質問①：『ゲーム自体やゲームの勝敗さらにはラリーの継続』76.4%、『基礎技能の習得』47.0%、『チームワーク等のコミュニケーションスキル』70.5%であった。

質問②：『ゲームの内容』44.13%、『基礎技能の未熟さ』38.2%、『チームワーク等の欠如』26.4%、『特になし』17.6%であった。

質問③：『パス』55.8%、『レシーブ』23.5%、  
『セット&アタック』52.9%、『サーブ』  
32.3%であった。

質問④：『チームワーク等のコミュニケーション』88.2%、『コート設営』20.5%、『ルールおよび審判法』14.7%であった。

## 3. 【F クラス：履修登録者数 33 名（男：27 名、女：6 名）回答者数 32 名】

質問①『ゲーム自体やゲームの勝敗さらにはラリーの継続』65.6%、『基礎技能の習得』50.0%、『チームワーク等のコミュニケーションスキル』50.0%であった。

質問②：『ゲームの内容』25.0%、『基礎技能の未熟さ』25.0%、『チームワーク等の欠如』21.8%、『特になし』50.0%であった。

質問③：『パス』56.2%、『レシーブ』12.5%、  
『セット&アタック』59.3%、『サーブ』  
40.6%であった。

質問④：『チームワーク等のコミュニケーション』84.3%、『コート設営』9.3%、『ルールおよび審判法』3.1%であった。

## V. 考察

### 1. 質問①に対する回答を事例として

各クラスの割合を参照すると、バレーボールの授業で楽しいと感じた場面については、『ゲーム』に関連した事柄であることが理解された。

バレーボールに限らず、球技の楽しさはゲームにあると考えられる為、基礎技能が未熟なうちにゲームを実践してもゲームが成立しないという事態が生起することを踏まえると、ルールの工夫やゲームライクドリルを応用し、早期からゲームに類似した授業計画を立案することが有効的であると考えられる。

### 2. 質問②に対する回答を事例として

授業がつまらないと感じた場面については、『ゲームの内容』についてであり、ゲーム中にラリーが成立しないことやチームバランスの不均等による一方的な負けゲームやその反対の勝ちゲームが成された場合を表していた。

換言するならば、ゲームを構成するチームメンバーとラリーを成立させる為の他チームメンバーに関する個人および集団の基礎技能の向上が必要不可欠であることを示していた。

付言するが、授業内でつまらないと感じた場面が『特になし』とする回答もあった。

### 3. 質問③に対する回答を事例として

バレーボールの授業で身についた技能について、『パス』と『セット&アタック』の割合が高かった。学生達は記述した回答には、高等学校や中学校時に受けたバレーボールの授業と比較して大学の授業では基礎技能の向上に向けたドリル練習や動作の確認等に時間を割いていることに対して好意的な反応を示していた。

授業内においては、パスに関してオーバーハンドパスやアンダーハンドパスが上達する技術的要素や練習ドリルを毎時間提供したこと、セット&アタックについてはアタック動

作の成功体験を多く経験させる意図としてネットを低く設定しながらも、スパイク動作を反復練習するドリル構成を用いたことが要因と考えられる。これらの練習ドリルを提供する際に工夫した点として、2人または3人に1球ボールを配球したことや動きの連続性を持たせることで直接的かつ間接的にボールへの関わりの時間を増やしたことにある。

一方で、基礎技能についての用語の定義と技能が混同されている実態が浮き彫りとなった。特に、『レシーブ』と『セット&アタック』の動作について整理されていないことが明らかとなった。

#### 4. 質問④に対する回答を事例として

バレーボールの授業を通じて身につけた技能以外として、多くの受講生は『チームワーク等を構成するコミュニケーションスキル』が向上したと記述した。

これは授業内においてコート設営等の授業準備やペアやグループで実施する練習ドリル、さらにはゲーム時におけるチーム分け等を固定化せずにランダムな形式を用いていたことが要因として挙げられる。また、練習ドリルの設定のなかで目標設定値をクリアするためにペアやグループが協力的な姿勢を取らなければならない状態を意図的に設けたことも関係しているであろう。学生達が基礎技能の習得やゲームの成立に向けて、互いに切磋琢磨しながら意見交換を繰り返す様子が散見されていた。

## VI. まとめと課題

2017年度バレーボールの授業について学生達の記述回答をもとに評価を下すならば、「ゲーム」と「基礎技能の習得」に向けた授業運営が成されていた実態を踏まえると学生の内なる満足度や充足度は満たされていたと理解される。しかしながら、ゲームを構成するチームメンバーやドリル練習を構成するメ

ンバーとのコミュニケーションの熟達度によって授業への満足度に影響を及ぼすことも理解された。

そこで今後の課題として下記の3項目を挙げ、授業展開を試みることにする。

### 1. 基礎技能の習得に向けたゲームライクドリルとゲーム性ドリルの複合的運用

履修者の多くが『ゲーム＝楽しい』とする意識を有している。また、個人やチームメイトに関する基礎技能の未熟さがラリーの継続には繋がらず、ゲームの醍醐味を喪失させていることを理解し、ゲームの内容によって『ゲーム＝つまらない』と転換されてしまう傾向にあることが明らかとなった。

またゲーム進行の構成要素であるチームメイトとの連携としてコミュニケーションもまた重要であることが認識された。

これらの事柄を複合的に捉えたと、履修者の『ゲーム＝楽しい』は『ネットを挟んだ攻防』であることを念頭に置き、基礎技能の習得に向けて『ネットを用いたゲーム性の高いドリル』を提供しながらチーム内の人間的連携やコミュニケーションを高めつつ、協同でのプレー場面の機会を提供することが求められる。

一方で、『基礎技能の習得を目的としたネットを挟んだゲームライクドリルを提供すること』と『ネットを用いないゲーム性ドリル』の複合的な運用を試みていく必要性があると考ええる。

### 2. ランダムな形式によるチーム作りを活用した練習ドリルの実施

授業時における学生達の様相を垣間見ると、クラス内での個々の人物特性やグルーピングが成されている実態がある。

その点について質問④の回答を参照してみると、学生達はバレーボールの授業を通じて新たに意思疎通の出来得る友人や仲間が出来たと回答している。

本科目のねらいに記したとおり、仲間との

協力関係における集団技能の習得の視点を考慮するならば、従前通り授業内で実施するランダムなペアリングやグルーピングを活用した練習ドリルの取り組みが果たす役割が大きいものであることが理解された。

### 3. 協同性の欠如する学生の取り扱い

質問②の回答のなかに『チームワーク等の欠如』についての記載があった。

2017年度前期の授業内の課題点としてチームワーク等に配慮出来ない学生に対する指導が十分に成されていなかったことが明らかとなった。

これは先のまとめで記したように『基礎技能の習得に向けたゲームライクドリルとゲーム性ドリルの複合的運用』さらには『ランダムな形式によるチーム作りを活用した練習ドリルの実施』を行なうなかで、コーチング要素を含めた言葉掛けや条件提示を施しながら改善を進める必要性があることを見出している。

#### 【注】

- 1) 公益財団法人日本バレーボール協会編『コーチングバレーボール（基礎編）』大修館書店, 2017
- 2) 中村恭之, 岩田靖, 吉田直見「中学校体育におけるネット型ゲームの授業研究——「連携プレイ」の役割行動を誇張するアタック・プレルボールの検討——」『信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要教育実践研究』第7巻, 信州大学, 2006, pp.1-10. 参照
- 3) 山中愛美, 竹内洋人, 勝本真「中学校体育におけるバレーボールのドリル教材に関する研究——男子のアンダーハンドパスに着目して——」『茨城大学教育学部紀要』増刊号, 茨城大学, 2014, pp.495-503.
- 4) 宮内一三「バレーボールにおける学習指導に関する一考察（第3報）——大学生のバレーボール観について——」『神戸親和女

子大学教育専攻科紀要』第5号, 神戸親和女子大学, 2000, pp.47-53.

- 5) 内田和寿・武田一「バレーボールの授業に関する研究」『桜美林論集』第32号, 桜美林大学, 2005, pp.123-134.

#### 【参考文献】

- 宮内一三「バレーボールにおける学習指導に関する一考察」『神戸親和女子大学教育専攻科紀要』第2号, 神戸親和女子大学, 1997, pp.103-113.
- 宮内一三「バレーボールにおける学習指導に関する一考察（第2報）」『神戸親和女子大学教育専攻科紀要』第3号, 神戸親和女子大学, 1998, pp.53-65.
- 内田和寿・松井泰二・高根信吾「大学生のバレーボールに対するイメージに関する研究」『日本体育学会大会予稿集』第57号, 日本体育学会, 2006, p.210.
- 松井泰二・矢島忠明・内田和寿「「チーム」における個の創造性を活かした課題解決法の検討：大学体育でのバレーボール教材を通して」『日本体育学会大会予稿集』第57号, 日本体育学会, 2006, p.210.